巻頭エッセイ

Opening Essay

彼女に泣かれた

野矢茂樹　Noya Shigeki

認知言語学者の西村義樹さんに「間接受身」というのを教わった。私は哲学が専門で，言語学は素人であるが，とても面白い話題であったし，少し私なりに考えたこともあるので，書いてみたい。

「彼女に泣かれた。」―― 受身なのだが，能動形はない。そこで間接受身と言われる。興味深いのは，英語では「彼女に泣かれた」という受身形の文を作れないというのである。といっても，間接受身がまったくだめというわけではない。例えば “I was rained on.” とか “I got rained on.” といった言い方はするらしい。なんと，“rain” が受身になるのである。しかし，このような例もあるが，一般的には間接受身は英語では表現しにくいという。

では，なぜ能動形のないところで受身を作るのだろう。私は愚考した。どうもこれは，私が困った場合，つらかった場合なのではないか。その受苦の感情が，受身の形を求める。さらに，ここには，「私にはどうしようもない」という諦め感も漂っているように私には感じられる。このどうしようもなさが，受身表現になるんじゃないか。

すると西村さんは我が意を得たりとばかりに，さらに話を押し進めた。「そうなんです。例えば財布を落としたときに，「財布に落ちられた」とは言えませんよね。財布の場合は，自分でどうにかしようがあると考えられているからでしょう。」

すると，一般化して，「あることがらによって私が困らされ，しかもそれが私にはどうしようもないものである場合には，それを受身で表現しうる」と言えそうである。だが，そこで私は反例を思いついた。人前でおならが出たことによって私が困らされ，しかもそれは私にはどうしようもないことであるにもかかわらず，「おならに出られた」とは言わない。「出もの腫れもの」は私にはどうしようもないことだが，「にきびに出られた」とも言わない。「高熱に出られた」とも言わないのである。なんだか私はもうすっかり楽しくなってきてしまった。

受身にするからには，相手は私にとって「他者」でなければならない。雨に対して，われわれはなにがしかの他者性を感じとり，「雨に降られた」と受身にする。他方，おならは我が身の内から生じたものであり，われわれはおならに自己を外部からおびやかす他者性を認めていない。つまり，ここには三つの要因がある。①受苦，②諦念，③他者性。本来自動詞で表わされることがらに対して，そこに私を苦しめる他者の姿を，諦めとともに見て取るとき，われわれはそれを能動形なき受身の形で表現する。私としては，なんとなく，これってとても「日本人的」だなあと感じ入ったのである。

そこで考えてみていただきたい，「雷に落ちられた」や「火山に噴火された」は日本語としてどのくらい自然だろうか。「火山に噴火されて飛行機が欠航になった。」―― どうでしょう。これは，雷や火山の噴火にどれほど他者性を認めるかということで，案外ひとによって意見が分かれるようである。

のや　しげき

1954 年東京に生まれる。東京大学教養学部卒。北海道大学文学部助教授を経て，現在東京大学大学院総合文化研究科教授。著書に『哲学の謎』『無限論の教室』『はじめて考えるときのように』『論理トレーニング 101 題』『新版 論理トレーニング』『入門！ 論理学』『哲学・航海日誌』など。